小学校での外国語教育についての一考察
その２

八重樫　由美

１．はじめに

２００２年より、「総合的学習の時間」の中で、「国際理解教育の一環としての外国語会話等が行われるときには、各学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習活動を行う」ことが、教育課程審議会の答申により可能になった。そして、２０００年から前倒しの形で実施する予定の小学校もでてきている。

昨年は、「小学校の外国語教育についての一考察」として、第二言語習得理論から早期外国語教育について考えるとともに、文部省指定の研究開発校の実践と私自身の実践から、英語活動について考察した。

本稿では、全国の、文部省指定の研究開発校出身の生徒を受け入れている中学校の英語教員を対象に行ったアンケートをもとに、研究開発校出身者の生徒の特徴や、小学校での英語教育に関わる指導形態、今後の取り組み、さらに小学校と中学校の連携について深く考察する。

２．アンケート調査

2.1 回答者

全国の文部省指定の研究開発校出身の生徒を受け入れている６１校の中学校にアンケートを依頼したところ、２７校の６４名の英語教員から回答をいただいた。

最近の研究開発校の出身者を教えている教員と、かつての卒業生を教えた教員など、状況は様々であるが、それぞれの経験をもとに回答していただいた。

2.2　内容と回答形式

このアンケートには、①英語能力・態度において、研究開発校出身者にあてはまる特徴、②先生方の普段の授業活動・内容、③小学校への英語導入についての賛否とその理由、④ＡＬＴ（外国語指導助手）とＪＴＥ（日本人英語教師）の関わり、指導形態、⑤小学校での教科書教材の扱い、⑥小学校英語教育へ望むこと、⑦小学校と中学校の連携、そして⑧国際理解に通じる英語教育に対する考え、の項目を設けた。回答は、選択式のものと、コメント欄での自由記載の形をとった。

本校では、特に、①研究開発校出身者にあてまはる特徴、③小学校への英語導

入についての賛否とその理由、④ＡＬＴ（外国語指導助手）とＪＴＥ（日本人英語教師）の関わり、指導形態、⑥小学校英語教育へ望むこと、そして、⑦小学校と中学校の連携を取り上げて小学校での英語教育について考察する。

2.3 アンケート結果と考察

2.3.1 研究開発校出身者にあてまはる特徴について

最初に、選択の形式で、英語の４技能（聞く、話す、読む、書く）と学習意欲・態度・関心面について、細かい項目に分けて研究開発校出身者と他の小学校の卒業生を比べてもらった。そして、その後で、研究開発校出身者に見られる特徴的なことを記述してもらった。ここでは、後半の記述の部分から主なものを取り上げて考察する。

特徴的なものは、次のようなものである。

・外国人に対して偏見や抵抗なく自然に接することが出来る
・他の小学校の卒業生との学力の差はあまり見られないが、英語やＡＬＴに慣れていて授業に意欲的である
・話すことにおいては、積極的であり、興味関心が高いが、書くことに対して抵抗感を持っているようなところがある
・大きな差ではないが、文字と音のつながりがなんとなくわかっている生徒が多い

この他にも、先生方の気づいた点として、聞く・話すといった動きのある活動を活発に行ってきたので、読んだり書いたりする中学の学習活動に、小学校と中学校とのギャップを感じ、克服出来ない生徒もいるというものがあった。

全体的には、小学校の時点で、コミュニケーションを図ろうとする意欲や積極性を育てるという点では、外国人に自然に接したり、英語に慣れ親しんでいるという良い面が出ていることを考えると、研究開発校の成果であると取ることが出来る。問題点としては、やはり小学校と中学校のつながりにあると思われる。このことについては、⑦の小学校と中学校との連携の項で考察する。

2.3.2 小学校への英語導入について

小学校への英語導入については、これまでいろいろな人々を対象に行われたアンケートがあるが、今回は、中学校の英語教育に携わり、さらに研究開発校で実際に英語に触れてきた生徒と接している教員の意見を尋ねた。結果は、次の通りである。

賛　成	：	３８
反　対	：	８
どちらかといえば賛成	：	１０
どちらかといえば反対	：	３
どちらともいえない	：	３

合計 ６２名

約８割の教員が賛成の立場を取っているが、その一方で強い反対もある。賛成の立場には、条件付きが多く、現状のままでは素直に受け入れられないという様子が伺える。

賛成・反対の理由として、次のような選択肢を上げ、当てはまるものをすべて選択し、また必要に応じて、その他の理由を書いてもらった。

賛成理由：

①小さい時から国際感覚を養うことが出来るから・・・・・・・・・・・・２７

②英語や外国人との交流を通して積極的な態度を身につけられるから・・３０

③音声の習得が早いという利点があるから　・・・・・・・・・・・・２６

反対理由：

④国語である日本語の習得を徹底的に行ってからの方がよいから・・・・・４

⑤小学校で英語を教える十分な準備ができるのかということと、
　また大きな負担になるのではないかと考えるから・・・・・・・・・・・・５

⑥小学校の段階で英語嫌いができるのではという不安を感じるから・・・・４

条件付きでの賛成があるということには前に触れたが、その代表的なものが次のものである。

・教師側の準備が整っているのであればよい
・小学校と中学校の関連性を考えて、系統だてたものがあればよい
・教育課程がそれにあわせて変わるのであればよい

また、反対の理由の中には

・小学校段階で能力差が確立してしまう
・子どもにとっても教師にとっても負担になるのではないか
・学校間格差が大きくなるのではないか
・高校入試が変わらない限りは何をやっても難しい

というような現実的な問題も上っている。

小学校に英語が導入されるということに、中学の教員がいろいろと考えるのは、国際理解教育の一環としての英語と、教科としての英語との違いが曖昧に扱われているからであると思われる。研究開発校によって、教科として設定して取りくんだ学校と、国際理解を全面的に出して取りくんだ学校があり、はっきりとした形が見えてこないというのもひとつの理由である。小学校側からすると、それぞれの学校の実態に応じての設定なので、それが総合学習のやり方なのであるが、中学校側からは、なかなか見えてこないものがある。私自身は、基本的には、小学校に英語学習・活動が導入されることには賛成であるが、現段階でのスタートには不安を感じている。勢いだけで始めてしまうと、最初はうまくいっても、継続していけるだけの確かな方法や目標がなければ得るものがないのではないかと考える。また、現実問題として各学校にＡＬＴが配置される可能性が極めて少ないことを考えると、中学のＪＴＥ（日本人英語教師）が小学校に専任として入り、それぞれの学年のＨＲＴ（学級担任）と長期の計画を練り、そして学校で話し合いを持ち、教員の共通理解を図った上でカリキュラム構成をしていくべきである。これは、少なくとも最初の２年は継続されるべきであると考える。このためには、地域の教育委員会がまず最初に動かなければならない。さらに、県レベルでの小学校の先生への研修も必要になってくる。実際に、研究開発校の先生方はお互いの実践を見ることもさることながら、様々な研修に赴き、指導方法や指導内容の研究を継続していたようである。

これまで、私は、ＪＡＳＴＥＣ（日本児童英語教育学会）の大会や数々のセミナーに参加してきた。この学会は２０年以上も前から、児童の英語教育の活動を広げてきたのだが、最初は、私立学校における、教科としての英語教育や個人主催の児童英語教育の印象があったが、公立学校の英語に関心が向けられ出した当初から、このテーマに積極的に関わり、効果的な活動の模索を行っている。ここに、多くの研究開発校の先生方が加わり、さらに幅の広いものとなったと感じている。小学校での指導者については、もちろん話題になるのだが、やはり一番重要なことは、何を教えるのか、どのようにして教えるのか、ということであった。この部分をつめなくては、始めることは出来ないであろうという結論であり、それを提供するべく多くのワークショップを行っている。

2.3.3. 指導形態-ＡＬＴ(英語指導助手)とＪＴＥ(日本人英語教師)の関わり-

研究開発校の中には、中学校の英語教師がＡＬＴの代わりに専任教師として入るケースや、ＡＬＴの助手役として働くケースが見られたのだが、これに関しての考えを書いていただいた。

指導形態に対しての意見をまとめてみると、次のようになる。

1）ＡＬＴかネイティヴスピーカーが教えるべき・・・１０
2）ＡＬＴがメインとなりＪＴＥが助手の形態　・・・・９
3）ＪＴＥ（中学校の英語教師）　・・・・７
4）ＪＴＥとＨＲＴ（小学校の担任）　・・・・２
5）ＡＬＴとＨＲＴ　・・・・１

アンケートの中には、中学校の現実を考えると、小学校へ英語教師が出向いて指導することが不可能だとして、始めから受け入れない意見あったが、専任として立場がしっかりと確立されるのであれば、小中学校間の連携にもなるので賛成であるという意見も少なくなかった。

音声面での指導という点では、ＡＬＴやネイティヴの生の発音に触れることに大きな意味があるという意見が多くあげられ、クラスを把握しまとめるという点では、ＨＲＴの関わりが重要であるという考え方も見られた。

昨年、盛岡市内の２つの小学校で、実際に英語を教える機会をいただいたのだが、その際、小学２年生のクラスにおいては、ＨＲＴに入っていただきティームティーチングの形をとって行ってみた。私は、ＪＴＥとして英語活動を中心に行い、ＨＲＴには活動に参加しながら児童の行動の把握をしていただき、あらためてＨＲＴの役割の重要性を感じた。

理想は、ＡＬＴに指導に入ってもらうことではあるが、それ以外の形態でも、工夫と努力次第でうまくいく可能性もある。また、ＡＬＴといった時に、ただ英語の母国語話者というだけではなく、教職の経験やＴＥＳＯＬ等の資格を取得している人であれば、クラスのマネジメントもうまく、児童の年齢に関係なくうまく活動を行うことが出来ると、自分の経験を通して感じている。

2.3.4　小学校英語教育に望むこと

実際に、小学校において何らかの形で英語学習が始まった場合、中学校もその実情を受け止め、柔軟に対処していかなければならない。これまでの授業を大きく変える必要はないにしても、小学校での経験を少しでも生かせる有効な方法等を考える必要が出てくるであろう。

そこで、小学校の英語教育に望むことを、記述式で自由に書いてもらった。その中でも多かったものを以下にまとめてみる。

・小学校と中学校の両校においての、指導内容や方法等の相互理解が必要である
・簡単な日常会話や便利な表現を習得する

・まずはローマ字・アルファベットをしっかり覚える
・コミュニケーション活動を通して、楽しく興味深い授業を展開する
・話そうとする意欲を高められるような指導や活動をする
・フォニックスや音声指導をする
・英語嫌いを作らない

ローマ字が出来ていないという現状も出され、英語の導入の時点でかなり大変であるという意見も少なくない。また、実際に小学校で英語に触れてきた生徒が、音声面でリーダーとなってクラスに良い影響を与えていたり、活動や会話に積極性を見せているので、これらの利点を大切にする意味で、コミュニケーションへの意欲や楽しさを中心においた活動や音声指導を多く取り入れた活動をするのが望ましいという意見もあった。

2.3.5 小学校と中学校の連携について

前項のアンケートの中で、小学校に望むこととして、小学校と中学校間での指導内容や方法等の相互理解の必要性が上げられていたが、この小学校と中学校との連携は、これまで以上に話題になり、避けられない重要な事柄であると思われる。そこで、この連携について、どのようにしていったらよいか、答えてもらった。

その結果は、次の通りである。

・相互理解のための状況・情報の交換をする機会を多く持つ
・授業参観の機会を設定する
・小中一貫のカリキュラムを検討する
・研修会を持つ
・連携は、根本的に無理である

これまでも、小学校、中学校間の交流や連携の必要性を感じていたものの、なかなか実践出来なかったので、これを機会に、お互いの情報を密に交換することが良いという意見が多く見られたのが特徴である。また、情報交換とともに、お互いの授業参観や研修会等の機会を持つことを上げている。お互いの忙しさを考え、最低限、小学校で扱ったものについての申し送り等があるとよいという意見も出されている。一方で、中学校と高校の連携さえ難しい現実を考え、小中の連携が不可能であるという考え方もある。

小学校と中学校との交流は、一見、中学校と高校の交流よりもより親密であるように見えるが、中学校の現状から見ると、年に数回の合同研修会があるにすぎない。もちろん、地域差があると思われるが、小学6年生の担任と中学の新1年

生の担任とのつながりが主で、他はお互いによく知らないことが多い。私は、公立高校を経て、次に中学校の教師になったのだが、中高の連携も濃いものだとは思わなかった。中学３年の担任と高校入試時期の高校との関わりは重要であるが、その他は接点がないというのが実情であった。

今回、国際理解教育の一環として、英語学習・英語活動を小学校に取り入れることをきっかけに、中学の英語教師が小学校に入るようになると、連携という意味でスタートできるのではないかと思われる。

３．まとめ

今回は、全国の研究開発校出身者を受け入れている中学校の英語教員に、実際に小学校で英語に触れてきた生徒についてのアンケートを実施することで、実態を知ることが出来たと同時に、様々な観点において、小学校における英語教育に対する意見を聞くことが出来た。

研究開発校を卒業した生徒たちは、小学校と中学校との学習活動の違いに、戸惑いを感じた生徒もみられはしたものの、全体的には、話すことと聞くことを中心とした活動を通じて、英語に親しみ、かつ外国人と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が身についたという成果がみられる。

小学校での英語教育に望むこととして、色々なことが上げられているが、一番は、小学校と中学校の連携ではないだろうか。小学校と中学校での活動に一貫したカリキュラムを望みはしないものの、指導方法と内容については、やはり相互理解が必要であると思われる。また、何度も強調していることではあるが、最初が肝心であるから、小学校内だけでの英語のスタートよりも、中学からのＪＴＥを導入しての出発が良いのではないかと考える。このことが小学校、中学校の連携にもつながるという考え方は、多くの先生方の中にもある。小学校の挑戦とともに、これからそれを受け入れる中学校側は、今後柔軟性を求められるであろう。

最後に、何を教えるのか、どのように教えるのか、という大きな課題に対しては、研究開発校の実践や様々なセミナー等を活用しながら、じっくりと取り組んでいく必要がある。

（岩手大学教育学部英語教育専修）

資料１

小学校で英語を学習した生徒の
中学校での英語学習に関するアンケート

１．年齢・性別をお教え下さい。　２０代　３０代　４０代　５０代　男性・女性
２．担当学年をお教え下さい。　１学年　２学年　３学年
３．全校生徒数をお教え下さい。　約（　　）名
（そのうち研究開発校出身者の割合は...　ほぼ全員　６～８割　ほぼ半数　４割以下）
４．ＡＬＴもしくはネイティブスピーカーとの授業がありますか。　はい　いいえ
「はい」とお答えになった方は、その割合をお教え下さい。　例：１学級　１回／週
（　　）

以下のアンケートでは、研究開発校出身者や、指導法等についてお尋ねしたいと思います。どの学校の先生方も、それぞれの現場にあった教授法を駆使し、日々努力されていることと思います。私自身は、高校教諭を経て、専門学校兼予備校講師、そして現在中学教諭となり５年になりますが、まだまだ研究の余地が多いと考えているところです。昨年、大学院で研究する機会を得て、半年間は、公立小学校で英語クラブの実践（４～６年）、小学２年の普通学級で実習をさせていただきましたが、この子ども達が中学に進んだ際に、どのような影響があり、また、今後小学校・中学校はどのように連携を図っていくべきかということに関心を持ちました。
研究開発校で英語を学習したことのある生徒に限ってお聞きするのは大変恐縮ですが、小学校で貴重な体験をした子ども達を受け持つ先生方の、より貴重なご意見・ご感想を承りたくお願い申し上げます。研究開発校と他校の出身者の間に、すでに比較できるほどの差がない場合があると思われますが、わずかなことでもかまいませんので、研究開発校出身者について感じられたことも記入していただければ幸いです。

５．研究開発校出身者について平均的にあてはまること全てに○をつけて下さい。他校出身者や例年の生徒と差が見られない場合は△を、項目とは逆の特徴が見られる場合には、×をつけて下さい。

(1)「学習意欲・態度・関心面」
【　】授業中、積極的に学習する
【　】英語に興味を持っている
【　】英語になじんでいる
【　】教師やＡＬＴ、ネイティブスピーカーと積極的にコミュニケーションをとろうとする
【　】「聞く」活動に積極的である
【　】「話す」活動に積極的である
【　】「読む」活動に積極的である
【　】「書く」活動に積極的である
【　】その他：①（　　）
【　】その他：②（　　）

(2)「聞くこと」
【　】リスニング能力が優れている
【　】ＣＤやテープから流れる習った英語を聞き取ることが出来る
【　】ＡＬＴやネイティヴスピーカーのやさしい英語をある程度聞き取ることが出来る
【　】知らない単語の意味を推測することが出来る
【　】聞くことに慣れている
【　】その他：①（　　）
【　】その他：②（　　）

(3)「話すこと」
【　】恥ずかしがらず話す
【　】だいたい正しい発音が出来る
【　】リズムよく話すことが出来る
【　】自然な口調で話すことが出来る
【　】自分の考えや感情を英語で伝えることが出来る
【　】文法的に正しく話すことが出来る
【　】文法的にはあやしいが、意欲的に話すことが出来る
【　】英語で積極的に質問する
【　】会話でつなぎ言葉を使うことが出来る
【　】発音に癖がある
【　】その他：①（　　）
【　】その他：②（　　）

資料2

(4)「読むこと」
【 】 正しい発音、リズムで音読出来る
【 】 自然なスピードで音読出来る
【 】 声に出して積極的に読んでいる
【 】 内容を考えながら音読することが出来る
【 】 内容を考えながら黙読することが出来る
【 】 知らない単語の意味を推測することが出来る
【 】 その他：①（ ）
【 】 その他：②（ ）

(5)「書くこと」
【 】 語句や文を聞いて正しく書き取ることが出来る。
【 】 伝えようとすることを簡単な文で書くことが出来る。
【 】 単語や慣用表現、構文などを覚えるのが早い。
【 】 文章表現が豊かである。
【 】 スペリングミスが多く、その中に特徴的なものがある。
【 】 その他：①（ ）
【 】 その他：②（ ）

6．研究開発校出身者は、小学校では「聞く・話す」の活動を中心にして、中学校で初めて「読む・書く」の活動を行ったわけですが、生徒に「読む・書く」ことに対する期待感や戸惑いのようなものはありましたでしょうか。また、中学校で本格的に英語を学習するようになり、生徒の英語そのものに対する興味や学力差のあらわれ等、お感じになることがありましたらお書き下さい。

7．普段の授業についてお尋ねします。

(1) 以前より会話によるコミュニケーション活動が増えましたか。
【 】 かなり増えた 【 】 やや増えた 【 】 変わらない 【 】 減った

(2) 以前より取り扱うようになった教材・教具などがありましたら○をつけてください。
【 】 教科書 【 】 教科書以外の文章教材 【 】 学習プリント
【 】 ＣＤやテープなどの音声教材 【 】 ＶＴＲやＬＤなどの映像教材
【 】 写真やピクチャーカード 【 】 フラッシュカード
【 】 その他：①（ ）
【 】 その他：②（ ）

(3) 以前より取り扱うようになった指導項目・活動などがありましたら○をつけてください。
【 】 教科書内容理解 【 】 文法指導・練習 【 】 音読指導・練習
【 】 発音指導・練習 【 】 文字指導 【 】 和文英訳指導・練習
【 】 自由／条件英作文指導・練習 【 】 会話指導・練習 【 】 ゲーム活動
【 】 その他：①（ ）
【 】 その他：②（ ）

8．小学校における「総合的な学習」の中に、国際理解に通じる英語教育がありますが、実際に、公立小学校で行われることについて、どのように思われますか。あてはまる項目に○をつけて下さい。

【 】 賛成 理由：【 】小さい時から国際感覚を養うことが出来るから
【 】英語や外国人との交流を通して積極的な態度を身につけられるから
【 】音声の習得が早いという利点があるから
【 】その他：①（ ）
【 】その他：②（ ）

【 】 反対 理由：【 】国語である日本語の習得を徹底的に行ってからの方がよいから
【 】小学校で英語を教える十分な準備ができるのかということと、また大きな負担になるのではないかと考えるから
【 】小学校の段階で英語嫌いができるのではという不安を感じるから
【 】その他：①（ ）
【 】その他：②（ ）

資料3

【　】どちらかというと賛成　理由：①（　　）
②（　　）
【　】どちらかというと反対　理由：①（　　）
②（　　）
【　】どちらともいえない

9．研究開発校の中には、中学校の英語教師がＡＬＴの代わりに専任教師として入るケースや、ＡＬＴの助手役として働くケースが見られましたが、この点についてのご意見をお聞かせ下さい。

１０．中学校から本格的に英語を学習する場合には、教科書を使用して学習していくことは不可欠であると思われますが、公立小学校の英語教育では、特定の教科書がなく体験的な活動を中心に学習することになります。小学校の学習指導要領が改定され、それに合わせて新しい教科書が準備されるのはまだ先のことですが、教科書教材の取り扱いについて、あてはまる項目に○を、あるいはその他の意見をお書き下さい。

【　】教科書は特に必要ない
【　】学校独自で作成する
【　】市販教材を利用する
【　】活動後に報告書的なプリントを発行する
【　】親子のコミュニケーションのための通信を発行する
【　】その他：①（　　）
【　】その他：②（　　）

また、小学校で英語教育が実施された場合の中学校での指導法や、小学校英語教育に望むことなど研究開発校の卒業生を受け持たれてお感じになることがございましたら、どんなことでもよろしいですのでお書きください。

１１．今後ますます、小学校と中学校の連携に関して、話題に上ることが多くなると予想されますが、この連携についてどのようにしていったらいいのか、お考えをお聞かせ下さい。

１２．最後に、国際理解に通じる英語教育とはどのようなものであるべきか、お書き下さい。

お忙しいところ、ご協力いただきましてありがとうございました。